

# 令和4年度第1回 群馬県教育イノベーション会議 議事概要

## 1 日時

令和4年12月23日（金）13時30分～15時

## 2 場所

群馬県庁 秘書課会議室（WEB会議）

## 3 出席者

会議構成員4名、ゲストスピーカー1名、県関係者15名

## 4 議題

非認知能力（社会情動的スキル）を育む群馬ならではの教育について

## 5 構成員・ゲストスピーカーの主な意見

- ・ 非認知能力育成の取組は、STEAM教育とも連携して、色々取り組めたら面白いと思う。日本から海外へこれらの取組を発信できたらよい。STEAM教育でも成果などを示す長期的な研究の蓄積は十分ではなく、感覚的に良いと考えられている面がある。非認知能力育成の取組について、しっかりと検討の蓄積を行ってほしい。
- ・ 教員自身がストレスなく試行錯誤したり、子ども達が体験するようなことを教員達や保護者も一緒に体験できるような非認知能力育成プログラムがあってもいいのではないか。
- ・ 非認知能力育成プログラムでは、できるだけ多様な考え方や生活背景などを体験できるような状態で学べるといいと思う。ある考え方などを糾弾するようなものではなく、皆で良いところを発見できるような形で進められるとよい。
- ・ これまでの認知能力を育てる教育、いわゆる受験勉強などと対極にあるのが非認知能力の育成だと思う。非認知能力を育成する取組が、あう子とあわない子がいると思う。子どもの特性や個性に配慮し、苦手な部分を支援してあげるような取組が大事。体験的な学びという観点から色々取り組んでいる。
- ・ SSESの調査対象は高校生だが、その土台となる小中学生からしっかりと非認知能力育成の取組を進めていってほしいというのが強い思い。
- ・ 非認知能力育成に係る学校現場が抱えている最大の課題は、見えない力を目標準拠にして規準をもって測ろうとしていることだと思っている。
- ・ 子ども達自身が自己評価をしっかりと積み重ね、振り返りつつ、一人一人の自己評価能力を高めていきながら、その自己評価に対して、先生が共感をもって、子ども達と対話することが大事。
- ・ プロジェクトベースで子どもも教員も学ぶことができるプログラミング教育を、子ども達の非認知能力育成のプロジェクトとして位置づけながら、さらにこの成果を進化、拡充させることが、非認知能力育成に向けた取組の具体的な手掛かりになる。
- ・ 非認知能力を育てることに結びつくようなデータの蓄積をもとに、子ども達が自分を振り返りながら、保護者もそんな子ども達の様子を理解しながら、新たに身につけた非認知能力を育てる方向性が良い。
- ・ 認知能力育成と非認知能力育成の関係について、調査研究結果から、非認知能力育成が成績向上と相乗効果があるということが示されている。

- 非認知能力育成プログラムの一定の方向性はあるが、これがベストという手法はなく、対象者に適合する育成プログラムの仮説を立て、実施し、改善を加えていくというプロセスを繰り返していくことが必要。
- 日本の子どもは、自分で主張して、責任を持って最後までやり遂げる部分がちょっと弱いので、始動人を輩出するにはそこから始めても良いのではと思う。特にこの部分は STEAM 教育と相性が良い。

(以上)